



Title	労働者政府序論 : 1918/1919年ドイツにおける
Author(s)	上杉, 重二郎
Citation	北海道大學教育學部紀要, 29, 1-7
Issue Date	1977-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29155
Type	bulletin (article)
File Information	29_P1-7.pdf



[Instructions for use](#)

労働者政府序論

——1918/1919年ドイツにおける——

上 杉 重二郎

Einführung in die Theorie der Arbeiterregierung in
Deutschland im Jahre 1918/1919.

Jujiro Uesugi

1

1976年秋のスウェーデンにおける総選挙において、社会民主党は敗北し、社会民主主義政府にかわってブルジョア諸党の政府が生まれた。西ドイツにおいては社会民主党は第一党の座を失ったが、自由民主党との連合を保持して政権を保った。この政府は、社会民主主義党とブルジョア政党との連合という限りでは、かのワイマル連合政府と類似したものを持っている。

日本でも近く衆議院の総選挙が行われる。その結果は、この論文が発表されるであろう時には、明確になっている。だからここでそれを予測するのは意味がないが、保守永久政権と名付けられる自民党政府が倒れるという予想を立てるひとは、まず見当らない。たしかにいわゆる革新政権について、いろいろに論ぜられているが、民主連合政府の可能性を信ずる者は余りない。

中国では毛沢東主席が死んだが、この小ブルジョアの農民政権が、どのような経過をたどって労働者＝農民政権へと発展し、「万国の労働者よ、団結せよ」というマルクスレーニンの呼び掛けに答えるかどうか。これはまだ未知のことに属する。

タイには軍人の政府が、アメリカ合衆国政府の努力と庇護の下に生まれた。民主主義と国民の自由とは、いっさい粉碎された。ローデシアではアメリカ帝国主義の露骨な干渉が続くにしても、黒人政府の成立は予見しうる将来のこととなった。

このように地球上のさまざまな国々において、大小の変化が繰り返し起っているが、それは人類社会発展の法則に従い、必然的にある目標を目指している。しかしそこにいたる道は多様である。現存する政府形態の多様さが、すでにそのことを疑いの余地なく示している。レーニンはこの多様な道の発見が、労働者階級の政治家にとって、極めて重要な課題であることを教えた。

本論文の対象とする労働者政府もまた、労働者階級が社会主義に到達する過程において取り得る、あるいは取る必然性を持つ政府として、ことにドイツ労働者諸党によって、第1次世界戦争終了後、1919年から1923年秋にいたる革命的戦後危機期において、追求された過渡的政府形態であった。

2

現在われわれがいかなる政府形態を追求すべきかという問題は、もとより極めて実践的な問

題である。しかし同時に理論的な問題でもある。そのことを、ことに右の時期におけるドイツ労働者運動の経験は教えている。この経験から知られることは、またこの問題がはなはだ困難な問題だということである。事実ドイツ労働者階級は、そしてその政党も、この労働者政府の問題を実践上においても、理論的にも完全に解決したわけではない。いな、むしろ解決できなかった、と言った方が精確であろう。

歴史家は歴史的事実を光のなかに浮び上がらせ、これを貫く法則をつかみ取ることを任務とする。従って本来彼らの仕事は、たとえばある時点において労働者階級はかくかくの行動に出たが、それは正しくなかったなどと判定することではない。しかしクローチェが述べているように、まさに「すべての真の歴史は、現在の歴史である」のだから、われわれは歴史家であっても、むしろ歴史家であるが故に、その時点に身をおいて、いかに行動すべきであったかを発見しようとする。それは現在いかに行為すべきか、という課題と直接つながっている。

3

労働者政府論を複雑にしているのは、1つには革命的戦後危機期において、ブルジョア政治家と労働者政党とがこれを異った概念として扱っていたのみでなく、また同じ労働者政党と言っても、社会民主主義政党と共産主義者とが違って理解したのみでなく、じつに同じマルクス主義者の間においても、彼らがドイツ共産党に属するか、あるいは第3インターナショナル執行委員会のメンバーであるにかかわらず、違った理解が存在したことである。

その結果、いまは労働者政府という、もっとも多く用いられた用語でこの概念を表現するが、「社会主義政府」、「純粋な社会主義政府」、「労働者＝農民政府」などの呼称も用いられた。これも問題の理解を混乱させた。

さらには1918年11月革命以来、ドイツにおいては政治情勢が激動した。諸階級勢力の星座は、絶えず変化した。フランスとイギリスおよびその他の協商諸国との関係、ロシアとポーランドおよびフランスとの拮抗関係、また上部シュレーゼンをめぐるドイツとポーランドとの対立、これに対するフランスの干渉、ラインランド＝ヴェストファレン州に対するフランスの絶えざる威嚇、ヴェルサイユ条約体制下のこうした、またそのほかの、たとえば賠償にかかわる緊張関係。これらすべての対外関係は、ドイツ国内の政治、経済情勢に強く影響した。

革命的戦後危機は11月革命以降、1923年秋におけるハムブルグ蜂起の敗北にいたるまで続いた。しかしこの時期を1色に塗り潰すことは許されない。それは上述の事情からも容易に理解されることである。(この点については、上杉重二郎「時代区分にかんするエッセー」『北海道大学教育学部紀要』第22号を参照してほしい。)

したがって当然のこと乍ら、革命的戦後危機期は複数のより小さな時期(時の段落)を持つのであり、それぞれの時の段落に応じた政府形態が求められねばならない。しかし今日においてさえ、この危機期をいくつかの段落に分かつことは、決して容易ではない。ましてやこの激動の流れの渦のなかに身をおきつつ、この流れの変化をとらえることは至難なことである。保守的なブルジョア政治家も時代の変化を認めないわけにはいかぬ。しかし彼らが保守主義者である限り、彼らにとって資本主義社会は本質的な変革を経験しないはずのものである。せいぜいこの変化は1種のニュアンスであるにすぎない、と考えられている。従ってブルジョア政治家は資本主義社会の本質的な変化、つまり社会主義社会への発展を恐怖するが、彼らの理論によってこの変化を規定することはできず、また上に述べたような時代の小段落が、現在の社会の

質的変革を用意し、これと結びついていることを理解しない。

4

社会民主主義者はひより見主者、改良主義者また修正主義者と呼ばれる。これは彼らがマルクスの理論を修正し、社会変革をもたらす革命を避けて、社会改良の積み重ねによって、あるいは繰り返しのよって、社会主義を実現できると信じているからである。より精確に言えば、社会主義が実現できると自ら信じている振りをし、また労働者大衆にもそう信じさせようとするからである。

ロザ・ルクセムブルクが「社会改良か、革命か*」のなかで、——彼女が1898年から1899にかけて『ライプツィゲル・フォルクス・ツァイトゥング』紙に書いた、この修正主義批判の古典的文献のなかで、——批判の対象とした古典的修正主義者エドワード・ベルンシュタインは、運動がすべてだと述べていた。そのことは、彼が社会を弁証法に従って、静止においてではなく、運動において扱ったことを意味しない。むしろはるかに単純に、社会はなんらかの循環運動を繰り返しているかのように理解されており、この運動が発展であり、革命という飛躍によって、すなわちSalto mortale死の跳躍によって、新しい社会を生み出すことを理解しなかった。ベルンシュタインはマルクスにmutatis mutandis必要な修正を加えてみせたのだが、そのことによつてマルクスの革命論を変革してしまった。より適切に表現すれば、マルクス主義を贗造した。

したがって彼らの理論によれば、すなわち小市民的理論によれば、——われわれはここで『共産党宣言』が小市民をいかに規定したかを想い出すことができる——諸々の時期、ないしは時の小段落は、当然のこと乍ら変革とはなんら結びつかず、本質的にはブルジョア理論家と同様に、それぞれの時の流れをただ彩るものにすぎない。彼らは科学的な時代区令とは無縁である。

事実ドイツ社会民主主義者が、ドイツ社会民主党の政治的指導者、また理論家が、彼らの身をおいた時期が資本主義のいかなる段階に属するか、社会主義という目標に対していかなる地点に位置づけられるか、このような問題について論じた例は、われわれの知るかぎり全くない。

5

いささか時代区分の問題に深入りし過ぎたが、ドイツ労働者階級の党は社会主義を目指し、革命の戦略および戦術を作り出さねばならぬ限り、必然的にその六分儀、マルクス主義の助けをかりて、歴史的発展のなかにおける自己の位置を確認する必要があった。ドイツ共産党の指導者は、歴史的発展段階を科学的に精確に掴むことによって、それぞれの時点における戦略、戦術を確定し、それに基いて労働者階級に対してそのたたかうべき敵とその進むべき方向とを指し示したのであった。

けれどもすでに述べたように、錯綜した国内また国外の政治的経済的また社会的な変動のなかにおいて、この仕事は極めて困難であった。共産主義者がこの点においてつねに成功したとは言いがたい。このことの1つの原因は、彼らがあまりにも楽観的であったことであろう。こう言えば、はなはだ観念論的な分析のように思われるかも知れぬが、この楽観主義は、ドイツの

*Luxemburg, Rosa: Sozialreform oder Revolution. In: Luxemburg, R.: Gesammelte Werke. Band 1, Erster Halbband, Berlin 1970. または in: Luxemburg, R.: Schriften zur Theorie der Spontaneität. Klassiker Rororo, Hamburg 1970.

この革命的戦後危機期においては、たしかに11月革命のある勝利という具体的な根拠を持っているのである。

1918年から1919年にかけての年の変わり目に開かれたドイツ共産党創立党大会は、ドイツ労働運動史上決定的な意義を持っていた。しかし今ここではそれに立ち入らない。ここではただ共産党が近く行われるべき国民議会選挙に参加すべきかどうか、これとの関連でレーテ(Räte, 委員会, ソヴェト), すなわち労働者そのほかの勤労人民の闘争組織であり、また同時に権力機関でもあった労働者委員会, 兵士委員会など(これらはしばしば協議会という日本語に移されている。この訳語はraten, Rat, cobet, という言葉から考えれば、正しいように思われるが、協議という言葉が複数の異質なものの間の相談という語感なので、内容から言えば、「委員会」の方が適切だと思う。)を、国民議会などのブルジョア代議機関に対してどう位置づけるか、これらの点が論議の対象となったことのみを、指摘しておく。

因みにカール・リープクネヒトやロザ・ルクセムブルクは、この論議に際して選挙への参加を主張した。このことが何を意味するかと言えば、彼らはすでに、11月革命のある勝利の局面が終って、敗北の局面が始っていたと判断していたことである。しかし彼らは党大会の代議員たちを説得できなかった。

リープクネヒト, ルクセムブルクらの率いるスパルタクス団は、労働者, 兵士に強い影響を及ぼした。そのことは例えば、ドイツ帝制が倒壊して、新しい政府が樹立されようとした時、ことに兵士たちが休戦を実現するために、リープクネヒトの入閣をほとんど強制したことに現れている。この入閣は、彼の提示した条件を社会民主党首脳が拒否し、これらが独立社会民主党のみと結合したので、1分間たりとも実現しなかった。これを強調するのは、後の労働者政府と関連があり、また共産党反対派がリープクネヒトは入閣することによって社会民主党の反人民的政策を事実上助けた、というデマゴギが、その当時からすでに飛ばされていたからである。*

さて、リープクネヒトおよびロザ・ルクセムブルクの判断の根拠は、次の点にある。スパルタクスは労働者の間に比較的大きな思想的影響を持ったが、しかし労働者委員会, 兵士委員会のなかで彼らが多数を占めるには、ほど遠かった。そこで委員会(レーテ)をたんに闘争の機関にとどめず、これを権力機関として活動させるべきだというスパルタクスの主張は、現実に存在する労働者委員会と兵士委員会において、支配的なものとはなり得なかった。

委員会を労働者階級の権力機関とするということは、二重権力構造を規定しないかぎり、ブルジョアの権力機関のすべてを否定することにならざるを得ない。国民議会は1918年12月の段階においては、まだ存在していないのであるが、そこに想定されたブルジョアの選挙制度からすれば、この代議機関がブルジョア的性格を持つことには、なんの疑いもなかった。さらに重要な点を顧慮するならば、このことはいっそう断乎として主張できた。すなわち選挙が行われようとする時点におけるブルジョアジー, ユンカー層, 農民層およびプロレタリアートの力の星座には、11月革命にも拘らずプロレタリアートの権力を生み出すような変化が見られなかった点, より具体的に述べれば、「皇帝は去ったが、将軍たちは残った」と言われるように、ブルジョアジーとユンカー層との権力機構, プロイセンの軍隊, 警察, 司法機関, 行政における官僚組織, これに加えて軍国主義的な教育制度, 言論機関は、事実上旧来のままであった、ということである。

*Pieck, Wilhelm: Der Novemberumsturz in Deutschland. "Die Kommunistische Internationale." 1921, Nr. 19. Vgl. besonders. S. 76ff.

もちろんたとえば軍隊内に兵士委員会が結成され、将校の権限が制限されたことは、大きな変化であった。しかし将校団は巻き返して、さすがに革命の暴風雨のなかで委員会そのものを廃止することはできなかったけれども、委員会内部におけるプロイセン将校の影響力を強め、兵士委員を彼らのスパイとして使い得るような場面さえ、現れてきた。兵士、軍服を着た農民が政治的に極めて習練の乏しい状態であったことは、よく知られているし、このことは現在日本の百姓の思想動向からも、十分に推測される。

このような状況下において国民議会が、旧来の帝国議会と若干の相違を持つにしても、国民議会が1920年にはまた帝国議会と改名するのであるから、この相違は大きなものではなかったことを思えば、全くのブルジョアの立法機関として誕生するであろうことは、疑問も余地がなかった。スパルタクス団も正しくそのように判断した。ブルジョアの国民議会とプロレタリア的委員会とは、共存し得べからざるものであった。したがって1918年12月の段階において、スパルタクス団が労働者委員会、兵士委員会のなかで、国民議会選挙に強く反対したのは当然のことであり、ここでも社会民主党と鋭く対立した。

6

しかしリープクネヒトとロザ・ルクセムブルクとは、委員会の大勢が選挙を支持する方向に固まったことを認め、来るべき国民議会選挙に共産党が参加すべきであるとした。けれども、すでに述べたように、この主張は創立党大会において却けられた。この結果は、2人の最高指導者の力不足を物語っているのだろうか。

むしろ強調したいのは、次の点である。現在では11月革命はプロレタリア的手段によるブルジョア革命とされる。けれどもスパルタクス団は、多数の労働者とともに社会主義を目指した。革命はプロレタリア的社会主義革命と考えられた。社会主義の勝利のために、そこに樹立さるべきは、ブルジョア共和国政府、ブルジョア議会に基礎をおいたブルジョア政府、あるいはブルジョア政党と社会民主主義政党の連合政府——これはワイマル連合政府と称されたものである——ではなくして、プロレタリアート独裁の政府であった。

プロレタリアート独裁こそ社会主義を準備し、これを実現すべき唯一の政府形態であり、これを承認することが、マルクス主義者と非マルクス主義者とを分かち試金石である。このことをレーニンが「プロレタリア革命と背教者カウツキ」などにおいて強調したことは、あまねく知られている。しかし彼はすでに1920年春に「共産主義内における『左翼』小児病」を書き、プロレタリアート独裁に至る過渡的な政府形態を、諸国の共産主義者はそれぞれの国の具体的状況に応じて見出すよう努力すべきことを要請している。たとえばドイツ共産党は1921年1月、社会民主党、独立社会民主党、ドイツ共産主義労働者党および諸労働組合に、有名な「公開状」を送って、統一戦線の結成を呼びかけている。この統一戦線によって支持される統一戦線政府が、過渡期の政府として当然予期されていた。

すなわち革命的戦後危機は、ドイツにおいても、引続き存在しているが、革命のテンポは1919年1月闘争が、リープクネヒトやロザ・ルクセムブルクの血に彩られて敗北に終って以来、明瞭に鈍化した。たんにテンポの量的な低下にとどまらず、質的な変化がそこに見られた。プロレタリアート独裁という目標を、ドイツ共産党はただ一度も引下げたことはなく、また労働者の目から隠したこともなかったが、すでにこの段階においてはプロレタリアート独裁の樹立は、直接の目標ではなくなっていた。少なくともそこに至る過渡的な政府形態が探索さるべき時点

が来ていた。

しかし乍らドイツ帝制を倒した11月革命の印象は、あまりにも強かった。ブルジョアジーと連合したのみならず、社会民主党領袖ノスケ国防大臣に典型的に見られるように、社会民主主義者はプロイセン的将校団、ユンカー層出身の軍国主義者たちとも、密接に結びついたが、それにもかかわらず、いなむしろその故に彼ら社会民主党首領は地方では口を開けば、「社会主義化」を唱えた。彼らは自分たちの、「国民の委託を受けた」政府を「社会主義政府」と称した。このことは、いまだ十分に理論的にも、実践においても、政治的訓練を受けていなかった労働者、兵士また小農民などを痛く混乱させた。

ロザ・ルクセムブルクはドイツ共産党創立大会において、党綱領について報告した。そのなかで彼女は、「……そして今日われわれは『社会主義政府』の頂点に、ただに社会主義運動のユダたち、プロレタリア革命の二心ある叛逆者たちを持っているばかりではない。一般的に言って、きちんとした社会には入り込めない監獄の住人が、そこにいるのだ*」

と述べて、労働者たちに社会主義と言う言葉に惑わされぬように、社会主義を称える者が実はしばしばその裏切者であることを忘れるな、と警告したのであった。

すなわち「社会主義政府」は決して社会主義を実現する政府でもなければ、また労働者権力の表現でもない。それが「プロレタリア革命の二心ある叛逆者たち」によって構成される政府であったとすれば、この政府はまがうことのないブルジョア政府であったし、しかもまがう惧れが存したが故に、むしろ「純粋にブルジョア的な」政府よりも、いっそうブルジョア的であり、より悪質であったと言える。

7

このような政治的諸経験のなかで、ドイツ共産党に結集した革命的戦闘的労働者は、当然のことながら「社会主義政府」に対して強い嫌悪を示すに至った。彼らの追求する政府形態は、11月革命の敗北にも拘らず、革命のテムポの鈍化にもかかわらず、そして政治情勢が新たな局面に入ったにも拘らず、依然としてプロレタリアート独裁の政府であった。

なかならずデモンストレーションの先頭に立った共産主義労働者を、エーベルト、ノスケ、シャイデマンら社会民主党政府の要員たちの命令によって発せられた銃弾が打ち倒し、真摯な戦闘的労働者の血潮がベルリンの舗道を覆い、流れた時以来、すなわち共産党員がバリケードをへだてて社会民主党首脳と相対峙する経験を持った1919年1月および3月闘争の後には、彼らにとって社会民主党員との政治的協力は、甚だ考えにくいこととなった。たとえバリケードの向う側に立っている者たちが彼らと同じ単純な労働者であっても、そのことは困難であった。

したがって多くの革命的労働者と戦闘的唯物論者は、「社会主義政府」がユダたちの政府であることを確認したが故に、かかる政府に入ることはもとより、これを外から支持することさえ、全く問題にできなかった。このCredo我信ずは疑いもなく正しかった。しかしこのDogma信条は、しばしばDogmatismus教条主義となる。それは極左的独断となり、新しい政府形態を発見する努力を抑え、社会民主党や自由労働組合傘下の労働者との協力を阻止した。レーニンの「共産主義内の『左翼』小児病」は、国際共産主義運動に対する測り知れない寄与であったが、とり

*Luxemburg, Rosa: Unser Programm und die politische Situation. In: Luxemburg, R.: Gesammelte Werke, Band, 4, S. 508. Luxemburg, R.: Rede zum Programm. In: L. Ruxemburg, R.: Schriften zur Theorie der Spontaneität. S. 215.

わけ当時のドイツ労働運動に対しては比較のない励ましとなった。この国際労働者運動の最高指導者の援助によって、リープクネヒト、ロザ・ルクセムブルクおよびレオ・ヨギヘスらを、プロイセン的反動将校の惨虐な手によって奪い取られた若い共産党は、極左小児病を次第に克服した。

しかしそれ以前にカップ＝リュトヴィツの叛乱が、1920年3月に勃発した。この叛乱にドイツ労働者階級およびドイツ共産党がいかに対処したか、そしてこの闘争のなかで彼らは極めて多くのものを学び、そして過渡期の政府形態、労働者政府をいかに具体的に提起するに至ったか、については、次の機会に述べることにしたい。

(1976年10月10日)